

# 外来者を受け入れる空間領域の構成

## —現代住宅の空間構成に関する研究—

日大生産工(院) ○岡本泰郎 日大生産工 浅野平八

### 1. 研究の意義と目的

近年、さまざまな要因から、家族の「個人化」という現象がひろがり始めている。「個人化」とは、家族として一住宅内で共同居住しているが、個々に社会関係を築き生活している状態のことである。通常、家族には個人という領域の前段階に家族の領域という共通の認識領域があり、プライバシー性あるいはパブリック性が考慮されていた。しかし、「個人化」に伴いこれらの空間領域も保証されないものになると考えられる。更に、社会への接点は家族の構成員の数だけあり、外来客の種類も相応に多様である。そうした場合、住宅内におけるプライバシー・パブリックの領域はどのように決定されるかは、現代の住宅設計における大きな課題である。

本研究では、外来者の視点からみた住宅の空間領域について検証する。外来者の行為は、住宅内におけるパブリックの領域を判断できると考える。現代の生活様式の変化とともに住宅の空間領域がどのような形式をとっているのかを、現代の住宅作品を対象として考察することが本論の目的である。

### 2. 研究の方法

#### 2. 1 対象事例

検証事例は、「ギャラリー・間」創立20周年を記念し、「住宅」をテーマとした展覧会・講演会を開催した際に、記念出版物として発行さ

れた、「日本の現代住宅 1985-2005」(註1)に掲載された住宅作品127事例から、家族構成が「夫婦」となっている22事例を対象に、分析を行う(表1)。

「夫婦」は单身を除く共同居住を行う最も小さな家族構成単位であり、外来者の視点から検証する際、他の家族構成に比べ、より明解に領域構成を顕在化できると考えられる。

表1. 「夫婦」という家族構成をもつ住宅事例

No.	作品名	設計者	掲載年	階層	bed room
1	秋穂のアトリエ	中村好文	1987	地上2階	1
2	阿品の家	村上徹	1990	地下1階、地上2階	1
3	NOS-h	石田敏明	1993	地上2階	※不明
4	軽井沢の仕事場	磯崎新	1993	地上2階	1
5	住居No.14筑波・黒の家	内藤康	1993	地上2階	3
6	森の別荘	妹島和世	1994	地上2階	1
7	家具の家	坂茂	1995	地上1階	1
8	太宰府の住宅	有馬裕之	1995	地上2階	1
9	Y-HOUSE	窪田勝文	1997	地上2階	1
10	トーフ	玉置順	1997	地上1階	1
11	玄海の週末住宅	塩塚隆生	1999	地上2階	1
12	矩形の森	五十嵐淳	2000	地上1階	1
13	F.O.B HOMES TYPE-A 001	梅林克	2000	地上2階	※不明
14	黒の家	千葉学	2001	地上3階	1
15	nkm	米田明、池田昌弘	2001	地上3階	1
16	黒/白の住宅 ヒムロハウス	小嶋一浩	2002	地上2階	※不明
17	ペンギン・ハウス	山下保博、池田昌弘	2002	地上3階	1
18	此花の長床	中村勇大	2002	地上2階	1
19	アストラウトの家	小川晋一	2002	地上1階	1
20	Y house	入江経一、池田昌弘	2003	地下2階、地上1階	1
21	ガエ・ハウス	塚本由晴+具島桃代/アトリエ・ワン	2003	地下1階、地上2階	1
22	アコ・ハウス	塚本由晴+具島桃代/アトリエ・ワン	2005	地上3階	1

#### 2. 2 外来者の行為レベルと領域の設定

外来者の行為には、居住者との信頼・親密関係に応じた行為レベルがあり、住宅内には外来者を受け入れるための、行為レベルに対応した設えが存在すると考えられる。

外来者の行為レベル(註2)は、会話などの「住

The composition of the sphere of space to receives for the visitor

A study on the space formation of the contemporary houses

Tairo OKAMOTO, Heihachi ASANO

宅内の設備機器を使用しないで行う行為」をはじめ、「食事」、「宿泊」といった大きく3種類のレベルで分類できる(註2)。設定した外来者の行為レベルと、行為に対応できると考えられる室名称を事例中から抽出し以下に示す(表2)。

表2. 外来者の行為レベル

行為レベルの配色	外来者の行為	行為に対応できる室の名称		
行為レベル1	設備を用いずに行える軽作業(談話・創作活動・読書・演奏・展示など)	風除室 アトリエ サンルーム ラウンジ ピアノ室	図書室 アルコーブ 応接室 スタジオ 音楽室	ギャラリー
行為レベル2	食事する(居住者と一緒に食事をする)	リビング リビング・ダイニング 居室		
行為レベル3	宿泊する(就寝する)	黒7(和室) 和室 ゲストルーム		
行為レベル3	室名称からでは行為が想定できないもの	黒1 黒2 黒3 黒4 黒5	黒6 黒9 黒10 黒12	広間2 室1 室2 室3 個室 広間1
行為レベル対象外	外来者が進入する機会がないもの	寝室 寝室ロフト 主寝室	ベッドルーム 子供部屋	
行為レベル対象外	隣接する室の付随的な役割を推察できるもの	テラス 物見台 光庭 床下収納 倉庫 納戸 納戸1	納戸2 納戸3 ベランダ(月見台) 収納 押入 ブリッジ バルコニー	

倉庫などの収納部や洗濯室、テラスなどの屋外空間は、外来者が使用することのないか、あるいは他室の補助的な空間であると推察されるため外来者を受け入れる領域外とする。

寝室、主寝室、寝室ロフト、ベッドルームは夫婦で1室という事例が、全22事例中20事例(表1)みられた。よって本稿では、夫婦で1つの寝室を使用すると仮定し、和室や夫婦の寝室以外の個室は、他の目的のために設えられた室として分析を行う。

子供部屋は、将来的に子供の寝室となることが予期されるため、行為レベル対象外とする。

## 2. 3領域区分図作成の行程

住宅内の領域区分を明解にするため、以下のA~Cの手順により空間配列、及び領域区分図

を作成する。図式構成要素には表2の行為レベル及び記号を用いる。

A.設計図から空間配列の構成要素となる室、動線(表2)を各階ごとに抽出する。

B.設定した記号を用いて、積層された構成をもつ事例も同一平面上に列記し、空間配列図を作成する。

C.表2で作成した領域レベルをBの図式に当てはめ、領域区分図を作成する。

図式の作成行程を図1に示す。

表3. 空間配列の構成要素と記号

行為レベルの配色	記号	機能及び機能室の名称	記号	動線の種類	記号
行為レベル1	□	トイレ	WC	扉下 開任切り建具	—
行為レベル2	○	バスルーム 黒11(浴室)	B	階段 スロープ	-----
行為レベル3	◇	台所 キッチン 黒6(台所)	K	玄関 エントランス	▶ or ▶
行為レベル対象外	◇	洗面所 化粧室 黒6(洗濯室)	U		

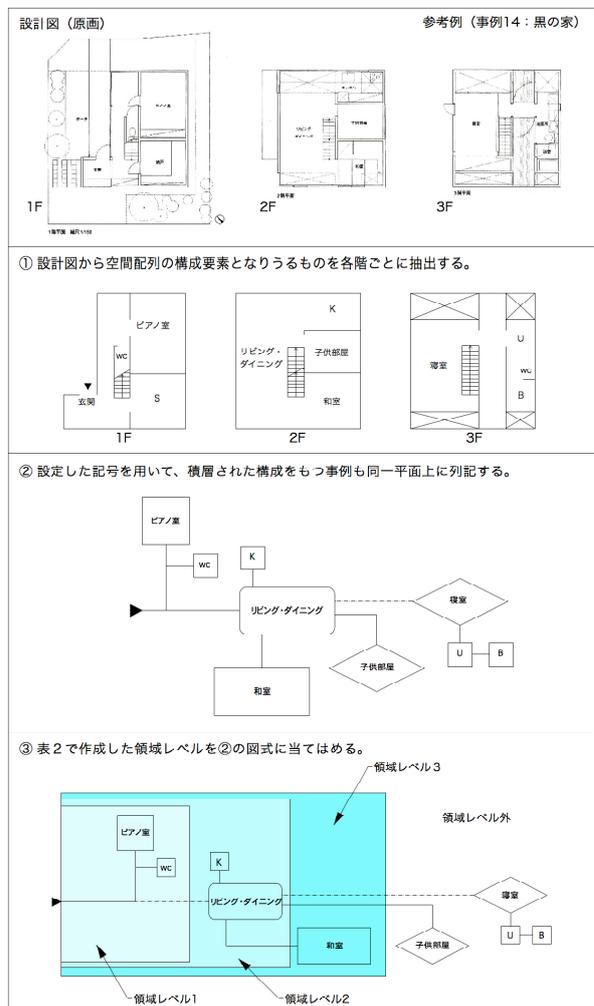


図1.空間配列図・領域区分図の作成手順

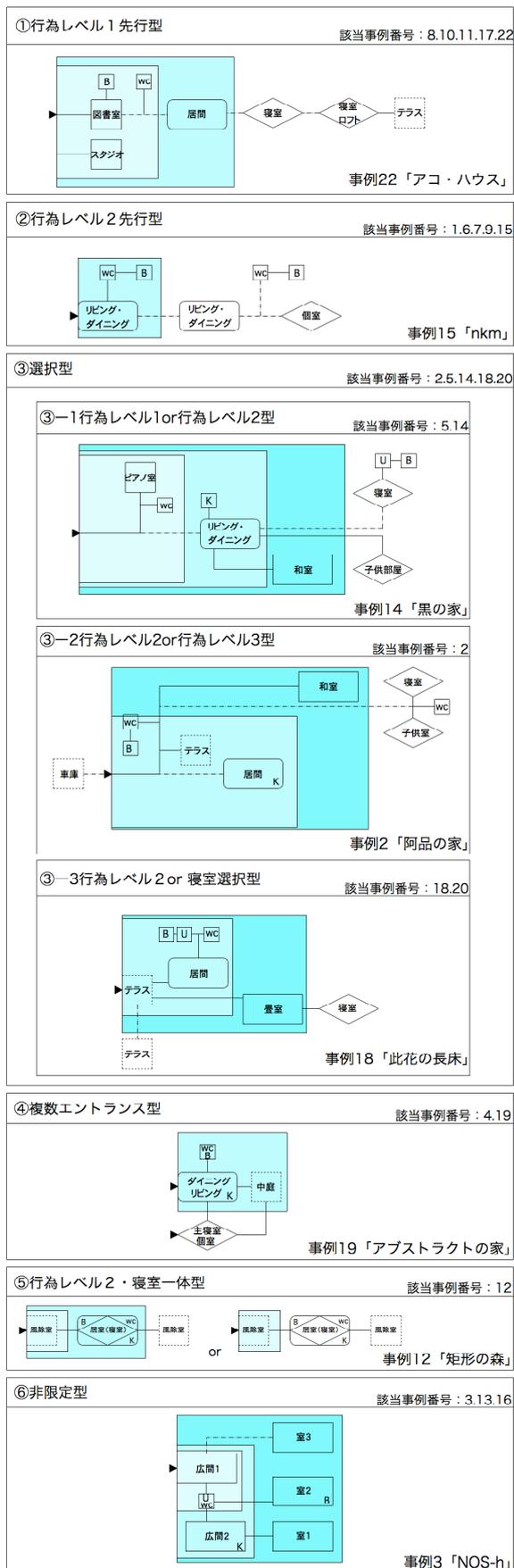


図2.領域区分図による分類

### 3. 領域区分図による分類

作成した図から分析した結果、全22事例は、「行為レベル1先行型」、「行為レベル2先行型」、「選択型」、「複数エントランス型」、「領域レベル2・寝室一体型」、「非限定型」の6項目に大きく分類した。図2に各分類の参考例を1事例ずつ示す。

#### 3. 1 「行為レベル1先行型」

この型は、行為レベル1に属する室空間に最初に入って行く型であり、特徴としては、家庭生活空間に進入することなく外来者を接客できる点である。但し、事例10、17は、トイレを行為レベル1内に設置されていないため、領域を越えて進入する可能性がある。事例8をみると、ギャラリーにトイレ、キッチン、バスルームが近接して配置されている。これは、就寝する寝室を除く家庭生活を行うすべての空間を、接客空間に用いている可能性が考えられる。

#### 3. 2 「行為レベル2先行型」

この型は、行為レベル2に属する室空間に最初に入る型であり、特徴は、家庭生活の中心であるリビング・ダイニングが玄関と隣接して配置されている。そのため、家庭生活と接客空間は共用することになり、外来者と居住者の親密度の程度が外来者を受け入れる空間を決定する。ただし、事例15では、リビング・ダイニングが1階と2階に1室ずつあり、それぞれにトイレ・キッチン・バスルームが使用できるように接続されている。これは、1階だけで宿泊以外のサービスを全てふるまうことができるため、プライバシーを保持しながら、接客空間を構成していることが考えられる。

#### 3. 3 「選択型」

この型は、玄関からの進入を2つ以上選択できる型であり、領域レベルごとに、③-1「行為レベル1 or レベル2 選択型」、③-2「行為レ

ベル2 or レベル3 選択型」、③-3「行為レベル2 or 寝室選択型」の3つのタイプに分類できる。

③-1、③-2に該当する3事例は全て、互いの空間に進入することなくトイレを使うことができる。これは居住者と外来者との親密度に応じて受け入れる領域を選択しやすくなると考えられる。

③-3に該当する事例は、寝室を他のすべての空間と分けることで、寝室のプライバシーを確保しながら住宅内における領域の自由度を高めている。

### 3. 4「複数エントランス型」

この型は、2つ以上の領域空間に玄関があり、プライバシー性の高い空間にまったく関わることなく接客が行える。そのため、外来者を受け入れる領域を最も制御しやすい構成となっている。しかし、行為を完全に分けるため、居住者にとって不便を強いる可能性がある。

### 3. 5「行為レベル2・寝室一体型」

この型は、就寝を含む全ての行為が一空間内に設定されている。つまり、住宅内がすべて接客空間となるか、あるいは外来者を進入させない可能性がある。該当事例の事例12の場合、屋根があり、テーブルも置いてある風除室が玄関手前に設置されているため、ここで接客が行われることが推察される。

### 3. 6「非限定型」

特徴は、室名からは行為が想定できない空間構成の型であり、行為を限定されないため、住宅に本来求められる行為や用途に限らず、さまざまな活用手段が考えられる。しかし、それには多様な使われ方を考慮に入れた規模や設備配置が必要となる。つまり、この様な場合、空間のプライバシー・パブリック性は住み手の能力に委ねられる割合が大きくなると推察され

る。

## 4. 結論

一般に、戸建て住宅は、施主の要求に対して計画・設計される。そのため、生活様式に規制はなく、個別解的な建築物となり、「個人化」のすすむ現代では空間領域を明解に捉えることは困難である。しかし、本稿の外来者の視点からみる領域構成の分析によって、「夫婦」という家族構成をもつ住宅のみの検証であっても、外来者を受け入れる領域にはいくつかの類型があることがわかる。

居住者ではない、いわば第三者の視点から住宅の領域構成を検証していくことは、多様化の進む現代の日本人の生活様式とそれに対応した空間をみるのに必要な視点のひとつであると考えられる。

夫婦以外の家族構成をもつ住宅の領域構成の分析については今後報告の予定である。

---

## 註

1. 「日本の現代住宅1985-2005」は、日本における数種類の建築雑誌バックナンバーに掲載されている住宅事例から、時代背景に基づいた作品事例を選び、それらの写真や図面を紹介している。したがって建築家によって発表された作品が網羅されているといえる。監修は石堂威、小巻哲、小島一浩、千葉学、淵上正幸らが務めている。
2. この場合の行為とは、設計時に予め設定されたと思われる行為のみをさす。例えば、「ベッドルームで食事をす」といった行為は除外する。

## 参考文献

- 1) 『日本の現代住宅1985-2005』ギャラリー・間 (2005. 12)
- 2) 『新建築』、『住宅特集』新建築社 (1987-2005)
- 3) 上野千鶴子『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』平凡社 (2002)
- 4) 黒澤隆『個室群住居』
- 5) 山本理顕『新編・住居論』平凡社 (2004)
- 6) 山本理顕『建築の可能性、山本理顕の想像力』王国社 (2006)
- 7) 渡辺真理+木下庸子『孤の集住体』